

企画・編集：兵頭朋子 近畿大学医学部 放射線医学教室 放射線診断学部門

序 説：未来を診る画像診断

画像検査によって、患者の過去に何があったか、現在何が起きているかを類推することができます。これに加えて、指摘しておくことで撮像時より未来に起こりうる重篤な病態を予測したり、治療の合併症を防いだりできる画像所見があり、読影の醍醐味の1つといえると思います。そして画像診断技術の発達によって、それまで把握できなかった病態をも可視化あるいは定量できることが示されてきました。画像診断は、単に病変を特定するだけでなく、治療効果や予後の予測へとその役割を広げ、放射線科医の仕事に新たな深みと可能性をもたらしています。

そこで、各領域の一線で活躍する先生方の知見を共有できるような特集を企画致しました。読者の対象は、若手医師や各領域を専門外とする画像診断医です。それぞれの記事で、著者が画像診断において特に注目しているポイントが際立っており、学術的な深さと臨床への応用が融合した優れた内容となりました。この場を借りて、貴重な寄稿をしていただいた著者の皆さまに深く感謝いたします。

本書には「〇〇サイン」に代表される画像所見用語が多数取り上げられています。特に初学者の方々には、それらが、①どんな所見で、②何を反映し、③どんな病的意義があるのかの3点をおさえ、人に説明できるように学んでいかれることをお勧めします。

本特集を通じて、これまで積み重ねられてきた知見や研究成果、技術の進歩が読影に生かされ、患者さんの利益につなげられることを感じていただければ幸いです。

兵頭朋子